

青年会を組織したという新聞記事があるが、エプワース青年会の可能性もある<sup>37</sup>。また、黄海道載寧でも青年の矯風を目的に載寧青年修養会がつくられた<sup>38</sup>。全北の金堤でも1918年に金堤青年俱樂部が組織された<sup>39</sup>。だが、これら数少ない青年会は活動もさほど活発ではなく、やがて財政困難に陥ったりしてうやむやになってしまう。

以上、韓末から1910年代までのYMCA・エプワース青年会・青年学友会・一般の朝鮮人青年会を概観した。これらの青年団体はおおむね、その目的を教育と修養・風俗改良・意識啓蒙などに置いており、その目的を達成するために講演会や討論会・運動会などの事業を展開していた。1918年までのこのような青年運動は、1919年の三・一運動以後雨後の筍のように誕生した青年会の運動目標や運動方法に相当の影響を及ぼしたと考えられる。

## 2 三・一運動以後の青年会の組織様相

### (1) 1920年代初めの青年会の勃興

三・一運動で青年・学生層が先導的役割を果たしたことから、青年層に対する社会の期待が大きな高まりを見せた。すなわち、青年層はすでに1905年頃より新文明と近代世界の主役として注目されていたが、三・一運動後には民族の将来を担う主体としてさらに脚光を浴びることになったのである<sup>40</sup>。たとえば、『東亜日報』に掲載された金濫植の「青年の使命」という一文では、「国家や民族の隆盛と政治の適否、教育の振興はすべて青年の双肩にかかっているといわざるを得ない。それゆえに青年の行為と思想は必ずや国家や民族の中心とならねばならない。すなわち民族の中堅、これが我ら青年の使命だ」と述べている。そして、この一文では、青年のなすべき仕事として、政治思想の提起・産業の振興・科学の研究・道徳の研究・宗教の改革・教育の普及などを挙げている<sup>41</sup>。

このような折、三・一運動の收拾のために新たに朝鮮に赴任した斎藤実総督は、いわゆる「文化政治」を標榜した。「文化政治」とは、一方では言論・出版・集会・結社の自由をある程度許しながらも、もう一方ではこれを厳しく統制するという統治方式であった。しかし、一定の自由が許容されると、新教育を受けた青年の間に、「文化向上」と「実力養成」を唱える、いわゆる「文化運動」が起こった。そして、このような文化運動を推進する主体として、青年会が雨後の筍のように全国各地で現れた。当時の日帝支配当局としては、青年会の急激な勃興について、「当局ニ於テ或程度迄言論集会ノ自由ヲ寛容シタルト一面ニ於テハ青年カ朝鮮独立ノ不可ナルコヲ悟ルト同時ニ假令一視同仁ノ聖世ニ処シテモ実力ヲ養成セスハ容易ニ文化ノ向上ヲ達成シ能ハサルヲ自覚シタル結果ニ外ナラス」

37 『毎日申報』1918年3月14日、「鎮南浦에서 青年会 組織」。

38 『東亜日報』1920年5月15日、「載寧青年会 組織」。

39 『東亜日報』1920年5月23日、「金堤青年会 發起總會」。

40 李基勲、前掲論文、38～39頁。

41 安建鎬、前掲論文、56～57頁。

42 『東亜日報』1920年6月21日、「청년의 사명」(金濫植)。